

ある秋の午後

中村 妙子

『エミリー先生』というイギリスの小説があります。原題をEmily Daviesといます。作者のミス・リードの本名はミセス・ドーラ・セイント。八十歳をこえた現在も作家活動を続けておられます。その作品は南英の丘陵地方の村に住む、作者と同じミス・リードという名の女教師を通じて語られる、物語の形の教育論でもあります。『エミ

リー先生』はそうした主流からいうと、いわば番外篇ともいいたいでしょうか。これには直接にはミス・リードは登場しません。

ピーチグリーンンの村のコテージに住むエミリー先生が亡くなりました。眠っているあいだに天国に召されたといいたいような平和な寝姿でした。さまざまな人の思い出が語られます。ユーモアに

富んでいた、強い、けれどもやさしい先生に手向ける、心のこもる言葉の花の数々です。

まずエミリー・デーヴィスと晩年をいっしょに暮らしたドリー・クレアが初めてエミリーに会った少女の日を回想する一章があります。転校生のドリーがエミリーの隣の席にすわり、その日から生涯にわたる友情の絆が結ばれたのでした。

二人は成長すると揃って教職につくことを希望し、学校こそ違いますが、子どもたちとの毎日とともに喜びを見出します。やがて第一次大戦が起こり、その間接の結果として二人は愛する者を失うという痛い経験をします。ドリーの場合は相手の男性による婚約の破棄によって。

この物語の終わりに近く、村の学校から隣町の高校に進み、卒業後、ロンドンの秘書学校を経てタイピストとして働いているスーザンという若い娘が母親からの電話でエミリー先生が亡くなった

と聞かされ、幼いころの思い出にふける二章があります。

スーザンはロンドンのフラットで四人の娘と共同生活を送っているのですが、掃除も、料理もする気のない友達との殺風景な生活に疲れて、故郷の村の空が、田園の風光がなつかしく思い出される朝夕でした。

家が学校の近くだったので、スーザンはエミリー先生とは学校に通うようになる前から顔馴染みだったので、五歳で幼児学級に入りました。入って早々、麻疹にかかって三か月ほど休んだので、ふたたび登校できるようになったのはやっとクリスマス休暇の後でした。

二月のある晴れた日、エミリー先生は幼児学級の子どもたちを引率して、近くのアレン農場に群生しているスノードロップを見に行きました。

スーザンはこんなにたくさんさんのスノードロップ

を見るのは初めてでした。雪のように白い小さな花がそつと頭を垂れている様子はなんとも可憐で、朝日の光を受けて透きとおるようでした。

母屋と裏庭を区切っている生け垣の背後に何頭もの子牛が毛のモジャモジャした頭をかしげで、睫毛に濃く縁取られている目でまじまじと子どもたちを見ていました。ぬれた鼻面から鼻息が水蒸気のように立ち上っていました。母屋のかげの塚の上に立って遠くに目をやって、スーザンは思わず息を呑みました。なんて広いのかしら！

そのとき、子どもたちに気づいたのでしよう、農場の飼い犬が丘の斜面をまっしぐらにこちらに向かって走りだしました。初めのうちは黒い塊が動いているに過ぎなかったのですが、近づくにつれて犬の伸びやかな四肢の整合運動に、スーザンは快い戦慄を覚えはじめました。前足をサラブレットのように誇らかにグッと伸ばし、後ろ足で

大地を蹴って、犬はその距離をまたたく間に縮めていました。耳がパタパタと揺れ、笑っているように歯をむき出していました。生の横溢を絵に描いたようなその姿が、病後間もないスーザンの心を強く揺さぶっていたのでした。

母屋のキッチンの白木の大きなテーブルの上には、湯気の立つミルクの入ったブルーの水さしが二つと、色とりどり、大きさも形もさまざまなマグカップがいくつも並んでいました。ジンジャー・ビスケットを山盛りにした、黄色い陶器のボウルも出ていました。

子どもたちの声のあふれる、居心地のよいキッチンと、戸外の果てしない空間とのコントラストを、スーザンは強く意識していました。家庭の暖かさ、そして外にひろがる無限の空間。肉体的な疲労のせいでもより感じやすくなっていたのかもしれない。スーザンは黙ってすわって、言

い知れぬ満足感にひたっていました。

帰りぎわにスーザンはミセス・アレンの堂々たる腰のまわりに両腕を回して、思いきり抱きしめました。

帰り道、疲れて歩けなくなったスーザンをエミリー先生がおぶってくれました。ほっぺたを大好きな先生の赤いコートの肩に寄せ、先生の背に揺られて進む快さ。見回すと友だちがめいめい小さな花束を大事そうに握って、ゴツイブーツをはいた足を運んでいました。みんなの吐く息が水蒸気のように立ち上り、あの子牛たちのことが思い出されました。

スーザンはその日のことを、エミリー先生の暖かい背中との感触とともに忘れられませんでした。

ロンドンのフラットの、脂でねっとりしているようなガラス窓の前に立って、スーザンは思ったのです。どんな子どもだって、いえ、大人

だって、息のつまるような、こんな不潔な環境で暮らすべきじゃないわ。

スノードロップの思い出、エミリー先生の思い出、子牛たち、そして彼らのモジャモジャした頭の向こうに見えるかさされた丘陵。あの世界に、わたしという人間の根つこのあるところにもどって行って、何がわるいの？

故郷の村に帰れば、二つの世界は併存しているのだ。居心地のよい、暖かいわが家と、無限の広さをもつ自然とが。わたしは自分の肌に関わらない生活を無理やり、自分に課してきた。本当



の自分を発見するために、今のわたしには広い空間と、新鮮な空気と、人のぬくもりが必要ではないのかしら？

誰からも愛されていたエミリー先生の力の秘密は、それだったのかもしれない——そうスーザンは思いめぐらしていました。エミリー先生はいつも自分のペースで歩いていました。どんなに忙しくても、どんなに辛いことがあっても、まわりの自然の風物を味わい、その喜びを生徒たちに伝える余裕を持っていました。曇りない、晴れやかな心によって培われた彼女の幸福——それは時に応じて、幼い者、力弱者に惜しみなく分かちあたえられてきました。エミリー先生の声呼びかけているようで、スーザンは故郷に帰る決心を固めていました……。

この物語は昨年十月半ばに出版されましたが、以来、さまざまな反響が訳者の私のところ

や、出版社（文京区小日向三十四―七 日向房 電話 ○三・三九四二・七八四〇）に寄せられました。読んだ人めいめいの心に、かつて教えを受けた先生方の面影がふと呼び起こされたようでした。ある読者は、やはり農村で地域の人々の愛情に囲まれてのどかな日を送っていらっしやる九十歳歳の伯母さまのことを記して、「アイヌ伝説に登場するコロボツクルのように小さい、小さい伯母ですが、背は小学校に教鞭を取っていた昔そのままにシャンと伸びています」と書いておられました。

なつかしい先生の思い出は私にもあります。旧制女学校時代の恵泉女学園で英語の手ほどきをしてくださった宮崎貞子先生。翻訳を仕事とするようになった私にとって、英語との最初の出会いの仲たちをしてくださったことになりました。

宮崎先生は津田塾大学の前身、津田英学塾がま

だ女子英学塾と呼ばれて麴町にあったところのご卒業で、私は一年生から英語を教えていただきましたが、真剣で、丁寧な教え方が心に残っています。いつも地味なお召し物で袴ははいていらっしやらなかったのですが、戦前には珍しいオーラルの授業でした。“Am I walking quickly or slowly?”と教室の中をあるいは急ぎ足に、あるいはゆつくりと歩いて質問なさっていたご様子をお出しします。

四年生の秋、小平の津田塾で恒例の英語劇の公演があつて、宮崎先生は土曜日の午後、希望者を連れて行ってくださいました。武蔵野の面影の残る校内を歩き、個室もある寮舎の、先生の姪御さんのお部屋を見せていただいたりもしました。ちようど野村胡堂氏のお嬢さん、野村瓊子さんの少女小説『七つの蕾』で津田の寮に住むさゆりという主人公（神谷美恵子さん、当時の前田美恵子

さんがモデルだと、美恵子さんのお友だちから聞いていました）に憧れていたわたしは、津田の、それも寮生になりたいと強く思ったものでした。

英語劇はシェイクスピアの『十二夜』でしたが、その午後のごとでわたしの記憶に残っているのは、秋の青空のもとをいつになく若やいだ足取りで先に立って木立の間を創立者津田梅子先生のお墓に案内してくださいました宮崎先生です。黒いお着物の裾を蹴るような、闊達な足さばきにひるがえって見えた裾の裏地の赤い色があざやかでした。

翻訳の仕事が続けて五十年。その出発点はあの秋の日にあつたように思うのです。

宮崎先生は熊本県のご出身。孫文と親交のあつた宮崎滔天の姪に当たられると聞いています。

（翻訳家）